

「公羊傳」の覇者觀：宋の襄公について

著者	中村 俊也
雑誌名	漢文學會々報
巻	33
ページ	11-22
発行年	1974-06-22
URL	http://doi.org/10.15068/00149236

『公羊傳』の霸者觀

— 宋の襄公について —

中 村 俊 也

〈序〉

「五霸」について、『白虎通』（號）においては、三通りの數え方をする。これら

一、昆吾氏（夏の時代）、大彭氏（殷の時代）、豕韋氏

（殷の時代）、齊桓公、晉文公

二、齊桓公、晉文公、秦穆公、楚莊王、吳王闔閭

三、齊桓公、晉文公、秦穆公、宋襄公、楚莊王

のうち、一の場合は、いわゆる春秋の五霸には該當しない。それは、二、三の場合に相當する。ここで、二をあげる理由としての霸者觀は、

霸者、伯也。行方伯之職、會諸侯、朝天子、不失人臣之義。（中略）霸猶迫也、把也。迫脅諸侯、把持其政。

（號）

であり、二、三の相違は、前者が吳王闔閭をあげるに對し、後者が宋の襄公をかかげる點にある。他の四者につい

ては全く共通である。それ故三の霸者觀は宋の襄公を評價するところより生じたものである。

宋襄代齊不擒二毛、不鼓不成列。春秋傳曰、雖文王之戰、不是過、知其霸也。（號）

ここに言う『春秋傳』とは、すなわち『春秋』の經文「冬十有一月、己巳、朔。宋公及楚人戰于泓。宋師敗績。」（僖公二十二年）における『公羊傳』の批評「以爲、雖文王之戰、亦不過此也。」を指していることは明白である。

かつて津田左右吉博士は、『左傳の思想史的研究』（岩波書店）において、「齊桓晉文に次いで考ふべきは宋の襄公の說話であるが、襄公を五霸の一人として數へ得るべきかどうかは問題である」としているが、これは『左傳』の思想に即した場合、當然抱かるべき違和感であり、前掲二の霸者觀に立つ限りにおいても當然である。『穀梁傳』においても宋の襄公に對する評價はこの傾向の中に含まれる。

ただし『公羊傳』は一貫して襄公を讚美する。この「理由」はどこに存するのか。それは『公羊傳』の他の思想とどうかわつてゐるのか。

本稿は以上の觀點より『公羊傳』の霸者觀を、宋の襄公に對する批評に即しつつ論じてみようと思う。

『公羊傳』と『左傳』、『穀梁傳』における宋の襄公評價

宋の襄公即位の年（紀元前六五一年）は齊の桓公が主催した葵丘の會があつたのであるが、その時の事について『春秋』の經文は記していない。宋の襄公については僖公十五年（周襄王五十七年—紀元前六四五年）の經文「冬、宋人伐曹。」

が初出のものである。これについて、『公羊』、『穀梁』二傳の注釋、批評は無いが『左傳』は「討舊怨也。」としてゐる。家鉉翁はこれを敷衍して

宋襄（中略）於桓之方存、已有圖霸之心。其後執滕圍曹、張本於此、春秋所譏也。（『春秋集傳詳說』）

と論じてゐるが、これは『左傳』の持つ宋襄評價に底流している傾向であろう。

さて、以下順次、經文をあげ、それに應ずる『公羊』と

『左傳』、『穀梁』の二傳の批評を比較してみよう。

「十有六年、春、王正月、戊申朔、隕石于宋、五。是月、六鵠退飛過宋都。」（僖公十六年經文）

『左傳』は④について、

隕石于宋五、隕星也。

⑤については、

六鵠退飛過宋都、風也。

の如く自然現象として現實的に把握し、さらに、宋の襄公が、當時宋國に招聘されていた周の内史叔興に對し吉凶を問うたに對し、叔興は後日、

是陰陽之事、非吉凶所生也。吉凶由人、吾不敢逆君故也。

と他人に本音を吐露したというが如きエピソードを載せてゐる。霸業を企圖する襄公に對し、あくまで冷靜な陳述の仕方をしてゐる。『穀梁傳』は

先隕而後石、何也。隕而後石也。

のように主に論理構成、記述の問題に終始しているので襄公評價とは關係ない。

『公羊傳』は①、②兩方を「五石六鵠」と總稱し、五石六鵠、何以書。記異也。外異不書、此何以書、爲王者之後記異也。

王者の後繼者のために異變を記したのであると言う。それは何休の

(齊大公世家)

王者之後、有亡徵、非親王安存之象。故重錄爲戒、記災

異也。石者、陰德之專者也。鷄者、鳥中之耿介者、皆有

似襄公之行。襄欲行霸事、不納公子目夷之謀、事事耿介自用、卒以五年見執、六年終敗。

の如き解釋を十分可能にするものである。休においては、

「五石六鷄」は襄公を象徴し、陰德を有しながら耿介にして失敗する不吉な王者の姿として把握される。これは即

『公羊傳』に流れる神秘主義的、豫見主義の表明であり、襄公に密着しつつ顕彰しようとする立場にはかならない。

僖公十八年の經文

「春・王正月、宋公・曹伯・衛人、邾人伐齊」

に對しては、『公羊』の解釋、批評は無いが、ここでは、他の二傳により、襄公が桓公没後の齊國にかかわってくる経緯が理解できる。

『左傳』の

春、宋襄公以諸侯伐齊。三月、齊人殺無虧。^{注二}

という説明は『史記』の

孝公元年三月、宋襄公率諸侯兵、送齊太子昭而伐齊。齊人恐、殺其君無虧。

と相似しており、襄公が強國齊の太子昭を擁し「公位」繼承戰に關與したことを物語る。『穀梁傳』の

非伐喪也。

は、所詮、宋國が大國齊を滅亡させる資格の無いことを示すようでもあるし、また同時に齊國の繼承問題にかかわつたという『左傳』の襄公に對する解釋と表裏するようでもある。

この事件に關連しての同年の經文

「五月、戊寅、宋師及齊師戰于甗。齊師敗績。」

に關しては三傳それぞれの解釋があるが、『公羊』のは他の二傳と大別され得る。

『左傳』の解釋は『史記』のと相通するものである。

齊人將立孝公、不勝四公之徒、遂與宋人戰。夏、五月、

宋敗齊師于甗、立孝公而還。

(『左傳』僖公十八年傳文)

結局『史記』においては、傍線の部分を、

齊人將立太子昭、四公子之徒攻太子、太子走宋。宋遂與齊人四公子戰。

(齊太公世家)

のごとく説明するのであり、繼承戰の實態が明白となる。

襄公は太子昭を擁立する齊人とともに、四公子と戦い、打ち勝つたというのが、經文の意味するところであるということになる。この場合には事の正否をのべない。そこにかえつて『左傳』の現實的立場を見ることが出来る。

『穀梁傳』は

戰不言伐、客不言及。言及、惡宋也。

として、經文の筆法に着目し、これは宋の襄公をそしつたものとしている。その理由を范寧は次の如く敷衍して言う。

今齊伯卒未葬、宋襄公欲興霸事而伐喪。於禮尤反。故反其文以宋及齊。

宋の襄公は桓公の喪儀が完了しないうちに霸業を自から成さんとして齊國に干渉してきたのは、禮にひどくたがうとしているのである。即ち襄公を嚴肅に批判している。

『公羊傳』は、これに對し、襄公が繼承戰に關與した正當性を強調する。

春秋伐者爲客、伐者爲主。曷爲不使齊主之。與襄公之征齊也。曷爲與襄公之征齊。桓公死、豎刁易牙爭權、不葬。爲是故伐之也。

ここにおいて、襄公は霸者桓公の葬禮を執行せず權力争いに終始する齊國內の勢力を討伐したのであつて、これはか

えつて非禮であるどころか、禮に合致する行動であると思われる。

これより僖公十九年（紀元前六四一年）の都合四ヶ條の經文は宋の襄公の積極的對外活動を物語っている。一つには軍事行動であり、また一つには會盟の主宰者となつたことである。これらについて、『左傳』、『穀梁傳』は批判的である。

「春王三月、宋人執滕子嬰齊。」

宋人執滕宣公。（『左傳』僖公十九年傳文）

「夏六月、宋公・曹人・邾人盟于曹南。鄆子會盟于邾。」この經文に關しては『公羊傳』は鄆子が會盟におくれたことを指摘し、次の經文に見えている邾人の行動に幾らかの理由づけをしようとするかに見える。

其言會盟、何。後會也。（『公羊傳』僖公十九年傳文）

「己酉、邾人執鄆子用之。」

これについて、『左傳』は、

夏、宋公使邾文公用鄆子於次睢之社、欲以屬東夷。（『左傳』僖公十九年傳文）

というようにその事實關係を説明し、ついで司馬子魚の宋

公に對する諫言という形で宋の襄公の行爲を批判している。要するに人を犠牲に用いることの非をのべたものだが、桓公のごとき義士ですら薄徳を言われるのに、人を鬼神にささげて霸者となろうとするようでは、その死を全うすることは困難である、と述べている。

齊桓公存三亡國、以屬諸侯。義士猶曰薄徳。今一會而虐二國之君、又用諸淫昏之鬼、將以求霸、不亦難乎。得死爲幸。（『左傳』僖公十九年傳文）

『穀梁傳』は微國の君主（鄫子）が自分によつて宋と會盟しようとしているのに、これを拘束した邾人の立場を批判している。^{注三}

微國之君、因邾以求與之盟。人因已以求與之盟、已迎而執之、惡之。故謹而日之也。

そして、『左傳』に言う犠牲について、

用之者、叩其鼻以衄也。（『穀梁傳』僖公十九年傳文）

と説明する。

一方『公羊傳』は、

惡乎用之。用之社也。其用之社、奈何。盖叩其鼻以血社也。（『公羊傳』僖公十九年傳文）

とのみ言い、鄫子が社祭に供せられたことをのみ論じ、宋の襄公の是非は言及しない。さきに事實關係のみを示した

『左傳』の立場と主客轉倒している感がある。

また、襄公の軍事行動を記した經文

「秋、宋人圍曹。」

については『左傳』の論評のみであるが、やはり子魚の諫言の形で、その實、宋の襄公を批判している。

子魚言於宋公曰、文王聞崇徳亂而伐之。軍三旬而不降、退、修教而復伐之。（中略）今、君徳無、乃猶有所闕、而以伐人。若之何。盍姑內省徳乎。無闕而後動。（『左傳』僖公十九年傳文）

ここに文王の討伐に對する徳治主義的な評價が述べられ、襄公の討伐が全く相反するものであることが指摘されているが、これは、のちに『公羊傳』が襄公の戦闘ぶりを文王の戦いにもまさると言っているのとかわだつた對照となっている。

宋の襄公は積極的活動を展開した末、僖公二十一年（紀元前六三九年）ついに、異域の楚國を會盟に加えようとした。^{注四}これが、襄公不幸の原因となることを『左傳』のみ豫測の言として載せる。

「宋人、齊人、楚人盟于鹿上。」（僖公二十一年經文）

春、宋人爲鹿上之盟、以來諸侯於楚、楚人許之。公子目夷曰、小國爭盟、禍也。宋其亡乎。幸而後敗。（『左傳』

僖公二十一年傳文)

そして經文に見えるように、その年、秋、襄公の敗北がもたらされる。

「秋、宋公、楚子、陳侯、蔡侯、鄭伯、許男、曹伯會于孟、執宋公以伐宋。」

經文の主客は宋公になつており、會盟の地も宋國の土地である孟となつているが、『左傳』は、諸侯が宋公を孟の地に會盟せしめたとし、その間に宋公に對する子魚の警告をさしはさみ、楚が宋公を拘束した、と事實關係を述べる。

秋、諸侯會宋公于孟。子魚曰、禍其在此乎。君欲已甚。其何以堪之。於是楚執宋公以伐宋。(『左傳』僖公二十一年傳文)

『穀梁傳』は經文の字句の説明(『以』の字が重復の字であることを示す。)に終わつているが、『公羊傳』は夷狄である楚が中華の宋國の君主を拘束するのには賛成できない、とする。それが、經文の意圖であると強調する。これは『公羊傳』全體を一貫する華夷思想である。

執執之。楚子執之。曷爲不言楚子執之。不與夷狄之執中國也。(『公羊傳』僖公二十一年傳文)

同年冬、楚人は宜申をつかわしてきて宋國に打ち勝つた戦利品を魯に献上してきた。

「楚人使宜申來獻捷。」(僖公二十一年經文)

『穀梁傳』においてもそれなりの華夷思想がある。必ずしも襄公を評價せぬものの、『春秋』は楚が宋に勝利したということを納得しない、と説く。

捷、軍得也。其不曰宋捷、何也。不與楚捷於宋也。(『穀梁傳』僖公二十一年傳文)

一方『公羊傳』はここにかんがりの言を費やし、『經文』が楚人を「貶」していることを言い、次に宋國が敗れたについては、襄公があらかじめ、宋、楚の兩君主で「乘車之會」(平和時會見方式)を約したのに、その會見の時、楚は約に違ひ、自身は『兵車之會』(戰時會見方式)で虚をつき、宋の襄公を拘禁し、宋國を破つたのである、と事實關係の説明をする。ここであいだに、公子目夷が、楚は夷國で、約束をたがえる懸念があるので『兵車之會』でのぞみなさいと言つたという忠言をさしはさむ。だが、宋の襄公は自から約義したことをやぶるのはよくないと『乘車之會』を堅持し出かけてゆくとしている。これはいわゆる『宋襄の仁』の一端を示すエピソードである。『公羊傳』はこの點を強調している。

宋公與楚子期以乘車之會。公子目夷諫言、楚、夷國也。疆而無義。請君以兵車之會往。宋公曰、不可。吾與之約

以乘車之會。自我爲之、自我墮之、曰不可。終以乘車之會往。楚人果伏兵車、執宋公以伐宋。〔『公羊傳』僖公二十一年傳文〕

さらに『公羊傳』は、この危急の時、襄公が公子目夷に一時國を託し、目夷はそれにこたえて、よく機知をもつて宋國を守つた後、幸いに釋放され目夷に國を譲ろうとするかの態度で衛國に入つていた襄公を、迎え入れたという事實を語る（ここでは長くなるので原文を省略）。そして、『公羊傳』は襄公の仁徳、目夷の愛國の功績を讀えるかの如く、次のように説明を結ぶ。

曷爲不言捷乎宋。爲襄公諱也。此圍辭也。曷爲不言其圍。爲公子目夷諱也。

〔『公羊傳』僖公二十一年傳文〕

宋の襄公が釋放された事實を経文は、

「十有二月、癸丑、公會諸侯盟于薄、釋宋公。」

と記す。ここに魯國の僖公が介在して宋の襄公は救出されたということになる。

さて、『左傳』は、宋の襄公が失敗にこりず、再びその「野心」を抱くことに對し、警告する。

冬、會于薄以釋之。子魚曰、禍猶未也。未足以懲君。

〔『左傳』僖公二十一年傳文〕

『穀梁傳』は『春秋』の筆法に觸れ、外國（薄は宋の土地）で釋放しということは記載しないはずなのに、記したのは何故か、というに、それは、僖公がこの會盟にあずかつて力があつたから言つたまでである、と述べている。（この部分の原文は省略）またさきに述べた如く「夷國」に對して、これが勝手にふるまうのを許さぬという立場を取つてゐる。

不言楚、不與楚專釋也。〔『穀梁傳』二十一年傳文〕

『公羊傳』も『春秋』の筆法に觸れ、僖公が宋の襄公釋放に參與したので、ふつうは拘禁された場合、釋放すると言わないのに、そう言つたのだ、と説明する。

執未有言釋之者、此其言釋之、何。公與爲爾也。公與爲爾奈何。公與議爾也。〔『公羊傳』僖公二十一年傳文〕

さて、僖公二十二年（紀元前六四〇年）宋の襄公に關して、經文は襄公が敗北の直後また軍事行動を開始したことを記す。

「夏、宋公、衛侯、許男、滕子、伐鄭。」

『左傳』はこの討伐が、宋國と深い敵對關係にある楚國に鄭國が走つたためであるという事情を説き、子魚の獨言として襄公の禍害を予告する。

三月、鄭伯如楚。夏、宋公伐鄭。子魚曰、所謂禍在此

矣。『左傳』僖公二十二年傳文)

そしてまたこの文章は、宋、楚二國間の情勢が最も險惡化していることを説く。

このような形は遂に大事とならずに済むわけがなかった。

「冬、十有一月、己巳、朔、宋公及楚人戰于泓、宋師敗績。」

『左傳』の場合、この戰爭の發端は、

楚人伐宋以救鄭、宋公將戰。(『左傳』僖公二十二年傳文)であるとし、楚國が同盟國鄭が宋に脅かされているのを救出しようとしたのである、と説明し、この間に華夷思想をさしはさまない。次に、大司馬の宋公に對する忠言を載せるが、

大司馬固諫曰、天之棄商久矣。君將興之、弗可。赦也已。弗聽。(『左傳』僖公二十二年傳文)

ここにおいて、商(殷人)が自からを呼んだ(呼稱)を再興しようとしたのが、宋公自身の覆業への挑戦の實體であつたことを述べる。『左傳』はこの企圖を「むなしきもの」と受けとめる。つまり、とつくに、天命は、宋國の上を去つていたのである、と説く。ところで宋、楚の戦いの様子を『左傳』の文章は最もリアルに説明する。

冬、十一月己巳、朔。宋公及楚人戰于泓。宋人既成列。

楚人未既濟。司馬曰、彼衆我寡、及其未既濟也、請擊之。公曰、不可。既濟而未成列。又以告。未可。既陳而後擊之。宋師敗績、公傷股、門官殲焉。(『左傳』僖公二十二年傳文)

宋公は多勢の楚國に對し、戰鬪上の原則論に拘泥して破れ去つたと言う。その原則とは、「國人」の非難に對し、宋公の言う辨明に如實にあらわれる。「自分は亡國(殷)の余り物だが、敵が陣を成さぬ時に、攻め太鼓を打つことはしない。」と言うものであつた。

國人皆咎公。公曰、君子不重傷、不禽二毛。古之爲軍也、不以阻隘也。寡人雖亡國之餘、不鼓不成列。(『左傳』僖公二十二年傳文)

この宋公に對する子魚の言が、これまでの批評から見て、『左傳』の立場であると言えよう。「三軍は利のために動かすものであり、鍾鼓は士氣を勵ますものである。利のためと分かれば足場の悪いのに付け込んでもよく、鳴り物がひびいて士氣が揚がったら、敵の陣が整わなくても、攻めてよい。」という思想には、古戦法の原則論より、近代戰の現實論を採用すべし、という主張がよく表出されている。

三軍以利用、金鼓以聲氣也。利而用之、阻隘、可也。聲盛致志、鼓儼可也。『左傳』僖公二十二年傳文)

『穀梁傳』は襄公の泓の敗戦を、『春秋』の三十四戦において、「夷狄」に「中華」の軍隊で敗れたということは類例がない、とし、

春秋三十有四戦、未有以尊敗于卑、以師敗于人也。

零地の恥をそごうとした公の襄公の個人的な私怨で軍隊を動かしたのは不當であつた、としている。

古者被甲嬰胄、非以興國也、則以征無道也。豈曰以報其恥哉。『穀梁傳』僖公二十二年傳文)

また『穀梁傳』は、

倍則攻、敵則戰、少則守。(中略)道之貴者、時。其行勢也。『穀梁傳』僖公二十二年傳文)

と泓の戦いの條を結ぶが、これは、道・法家的兵戦論を反映したものである。

『公羊傳』は、『春秋』は、結局、敵が陣立てしないうちには攻撃しないという宋の襄公の立場に賛同しているのだ、と説いている。

偏戰者日爾、此其言朔、何。(中略)故君子大其不鼓不成列。臨大事而不忘大禮、有君而無臣、以爲雖文王之戰、亦不過此也。『公羊傳』僖公二十二年傳文)

そして、「大事にのぞんで大禮を忘れぬ」宋の襄公の態度を「文王の戦争でもあり得まい」と激賞する。

以上三傳の相違は、襄公の終焉の經文に對する説明、批評に端的にあらわれる。

「夏・五月、庚寅、宋公玆文卒。」

夏、五月、宋襄公卒。傷於泓故也。『左傳』

不葬、何也。失民也。其失民、何也。以其不教民戰、則是棄其師也。爲人君而棄其師、其民孰以爲君哉。『穀梁傳』

何以不書葬、盈乎諱也。『公羊傳』

『左傳』は死因を述べ、『穀梁』は、宋の襄公を「葬す」と書かなかつたのは、民を失つていたからである、と言い、宋襄を批判する。對するに、『公羊傳』は、「大いに襄公の死を諱んだから。」としている。『公羊傳』は終始一貫、襄公の立場に即し霸公を顯賞し、襄公の立場に即し辨じていると言えよう。

『公羊傳』の基本的立場

これまで述べてきた『公羊傳』の襄公評價の中には、いくつかの『公羊傳』自體の基本的立場が看取された。まず

「五石六鷁」にあらわれる神秘主義的、予言的立場があげられる。このような記述は、怪奇現象を記す「何以書。記異也。」という形で、^{注五}『公羊傳』全體にあらわれるが、最も顯著な形のは、哀公十四年（紀元前四八一年）の「獲麟」に關する批評であらう。ここに、「麟」は「王者出現の予兆」としてあらわれると説かれており、これはまた、そのまま、「君子曷爲爲春秋。（中略）制春秋之義以俟後聖、以君子之爲亦有樂乎此也。（『公羊傳』哀公十四年傳文）」という『春秋』制作の意圖に象徴的に連なるものであると言える。

「春、西狩獲麟。」

何以書。記異也。何異爾。非中國之獸也。然則孰狩之。薪采者也。薪采者、則微者也、曷爲以狩言之。大之也。曷爲大之。爲獲麟大之也。曷爲獲麟大之。麟者、仁獸也、有王者則至、無王者則不至。有以告曰、有麋而角者。（『公羊傳』哀公十四年傳文）

同時に、この文章の次に見える。

孔子曰、孰爲來哉、孰爲來哉。反袂拭面、涕沾袍。（『公羊傳』哀公十四年傳文）

の條は、理想に生きる者のみもつはげしき涕泣を活寫している。この「理想主義」的傾向もまた、『公羊傳』に顯著

なものであつた。

また宋の襄公の齊國の公位繼承戦への關與に關する説明（『公羊傳』僖公十八年傳文）と、楚が宋霸を把捉したことに關する批評（『公羊傳』僖公二十一年傳文）等に見える華夷思想も、『公羊傳』共通の特徴である。これは元來程度の差はあれ、三傳に共通する傾向であるが、華夷思想が如實に語られるのは、齊桓に關する傳文である。莊公三十年（紀元前六六四年）の經文

「齊人伐山戎。」

について、『公羊傳』は桓公を「貶」している。一體、他書においても、齊桓の評價は褒貶相半ばするのであるが、^{注六}その點は、『公羊傳』においても同様である。

此、齊侯也、其稱人、何。貶。曷爲貶。子司馬子曰、蓋以操之爲已蹙矣。此蓋戰也、何以不言戰。春秋敵者言戰、桓公之與戎狄、驅之爾。（『公羊傳』莊公三十年傳文）

本來の「攘夷」ということは、ただ單に「夷狄」を驅逐することのみの原則無きものではない。ましてや、「夷狄」よりの戦利品をひけらかして他國に脅威を與えることではない。「六月齊侯來獻戎捷。」（莊公三十一年經文）

齊大國也。曷爲親來獻戎捷、威我也。其威我奈何。旗獲而過我也。（『公羊傳』莊公三十一年傳文）

このような、魯國に對する齊の桓公の大國主義的態度は批判されている。

桓公の功績は、夷狄が連合して中國を分斷しようとする危機をば、夷狄をしりぞけることによつて救い、ついには、楚國を服従させたことにある。これは、前後の君主よりすぐれている、とするのである。

南夷與北狄交、中國不絕若綫。桓公救中國而攘夷狄、卒怙荊、以爲王者之事也。（中略）前此者有事、後此者有事矣、則曷爲獨於此焉。與桓公爲主、序續也。（『公羊傳』僖公四年傳文）

ここにおいて、楚國は「夷狄」の最強國と目されているわけであり、宋の襄公のちに、この強國に對するに、古代の戰陣の儀禮をもつて、あくまで抗する姿勢には、「華」と「夷」の象徴的な對峙がうかがえよう。そのことを『公羊傳』は強調していると解釋できる。

終りに、宋襄の「仁」に顯著にあらわれるような理想主義的、原則主義的方向を述べてみよう。それはそのまま、「經」と「權」の兩者をどう見ているか、という『公羊傳』の基本姿勢にかかわる。この點については、「權」は「經」（通常の道）と相反するものとして、まず考えられ、生死にかかわる以外用うべきでない、と規定されている

が、これは、現實主義的方向に反する行き方であり、また「權」をなすには自己を損なつてすることはあつても、人をあやめてし、人を殺して自からが生き、人を亡きものにして自分が存するということを、君子は爲さない、としている。これは、功利主義、便宜主義を排除する傾向である。従つて、また理想主義的行き方と言えよう。

權者、何。權者反於經、然後有善者也。權之所設、舍死亡無所設。行權有道、自貶以行權、不害人以行權。殺人以自生、亡人以自存、君子不爲也。（『公羊傳』桓公十一年傳文）

（結語）

『公羊傳』の霸者觀をうかがつてみると、齊桓については他の三傳と同様功罪半ばする。但し宋襄については徹底してこれを辨じ、顯賞する立場をとつている。大國齊國の霸者―桓公のかげにかくれてしまひ宋襄は明白に霸者として想起し得ないが如くであるが、『公羊傳』が本來的に持っている神秘主義、予見的思想、華夷思想、理想主義・原則主義的方向に照らしてみると、これらを全部兼ねそなえ賞揚されているものが、宋襄なのである。

私は、近世中國が、外國の侵略にさらされた時、必ずし

も日本の如く迅速にかつ現實的にこの狀況に對應し得ず、一見不器用にまた魯鈍に立ち向かつたことを想い起す。周知の如く、この時期『公羊傳』は廣く學界に流行していた。

あくまでも理想主義的な政治規範をもつて外夷の侵略に對した中國の誠實さにこそ『公羊傳』の言う宋襄の影がきざしていたように思えてならないのである。

一九七四年二月二十日（本學助手）

注一 『史記』には「而齊桓公會諸侯于葵丘、襄公往會。」（『史記』宋微子世家）とある。襄公即位の年は、桓公主導型の國際社會の時期にあたる。

注二 『史記』には「無虧」を「無詭」と作っている。

注三 『穀梁補注』（鍾文丞著）には詳細な説明が見える。

注四 「三月、鄭伯如楚。夏、宋公伐鄭。」の文が上にある。この間の事情をうかがうに足る。

注五 『公羊傳』には都合約三十四ヶ所見える。

注六 この點については、『春秋傳』にあらわれた五霸について（二）（『金澤大學教養部論集』人文科學篇）四—一九六七年—山田琢氏著）に見えるように、すでに氏が指摘されている。